

問題ある観光を行う観光者の意識

—ウルル（エアーズロック）登山最終年の事例から—

A Study on Consciousness of Tourists Doing Problematic Tourism

宮本 佳範

Yoshinori Miyamoto

愛知東邦大学経営学部

観光者が求めるアクティビティは必ずしも地域の人々が歓迎する行為ばかりではない。持続可能な観光の実現に向けて問題ある観光を減少させるためには、問題があることを知りつつ行う観光者の意識を明らかにする必要があると考えた。そこで、本研究では、文化的事情等からこれまでも度々問題視されてきたウルル（エアーズロック）登山に着目し、ウルルに登る観光者に聴き取り調査を行った。そして、問題視されていることを知りつつウルル登山を行う観光者には、問題に対する共感的理解の欠如や神聖な山に対する日本人の感覚、善悪判断の他者準拠傾向などの特徴があることが分かった。観光者の問題行為の原因として文化的無知が挙げられるが、問題の性質によっては、文化的に問題があるという知識だけでは行為の抑制につながるとは限らず、共感的理解が重要であることが明らかになった。

1. 問題意識

観光者が求めるアクティビティには様々なものがある。歴史的建造物や雄大な自然を見て楽しむことはもちろん、登山やトレッキングなどアウトドア的な活動を好む者、オールインクルーシブに滞在し優雅に過ごしたい者、現地の人々との交流や異文化体験を求める者、観光者がほとんど居ない場所を訪れたいと考える者など、その志向は多岐にわたっている。

しかし、観光者が望むアクティビティは、必ずしもその地域の人々が歓迎する行為ばかりとは限らない。観光者による観光対象に悪影響を与える行為、住民の感情を害する行為、風紀を乱す行為、宗教的な忌避事項に該当する行為などが各地で問題視されている。また、旅行会社等が、利益を優先するあまり問題ある観光を提供する場合もある。社会的責任を考えるならば、旅行会社等は観光者のニーズに応えるだけでなく、観光地住民に十分配慮し、問題ある観光アクティビ

ティは仮に観光者が望んでも提供しないという姿勢で観光者を適切に管理すべきであろう。

いずれにしても、旅行会社等が観光者のニーズを踏まえてサービスを提供することを考えれば、問題ある観光アクティビティを望む観光者の責任は重大である。もちろん問題の性質や旅行会社、ガイドブック等による情報提供の在り方によっては、観光者が現地の事情、参加するアクティビティに内在する問題などを知ることが難しい場合もある。しかし、明らかに問題ある観光であることが知られていても、それを求める観光者は後を絶たない。

持続可能な観光の実現には、世界各地で起きている現地住民が望まない問題ある観光をいかに減らしていくかが重要である。そのためにも、当該観光を行う観光者の特性を明らかにする必要がある。そこで、本研究では、文化的事情等からこれまでも度々問題視されてきたウルル（エアーズロック）登山に注目し、ウルルに登る日本人観光者の意識について考察する。

2. 論点の整理と本稿の視点

(1) 問題ある観光について

ある観光アクティビティを問題ある観光（非倫理的行為）とみなすか否かは、人や立場、観光との関わり方等により異なる場合がある。また、問題を有する場合でも、当事者がどの程度の問題として認識しているかにより、その観光アクティビティへの対応は異なってくる。当該観光を禁止する場合もあれば、観光事業者や観光者への配慮、地域のメリット等が考慮されて許容する場合もある。問題ある観光を考えるにあたっては、問題視する「主体」と「程度」を考慮する必要がある。

観光に関わる主体としては、Smith(1977)が示したホスト（観光地住人）・ゲスト（観光者）の区分が知られている。さらに両者を媒介する観光事業者や政府・自治体等を指すブローカーを加えた区分などが、観光研究の分野で用いられている(安村 2011)。ただし、McNaughton(2006)が、ホスト地域で観光と関わる者の多様性を示してホスト地域として一括で捉えることの問題を指摘しているように、同じ地域の者であっても観光との関わり方や文化的背景などによって、観光に対する問題意識は異なってくる。筆者がこれまでに調査した少数民族観光などはその典型的なケースであり、同じ地域の住民であっても、多数派民族と少数民族とでは観光にかかわる問題の捉え方に大きな違いがみられるのである。また、ブローカーについては、観光者送出国側のブローカーと現地のブローカーでは、観光から利益を得るという点は同じだとしても、文化的背景などは、前者は観光者側、後者は観光地側として捉える方が妥当である。そういった点を考慮して、本稿では次のように問題ある観光を取り巻く状況を捉えるものとする。

ホスト地域については、当該観光を「ほぼすべての者が問題視している状況」「問題視するのは一部の者であるが、地域としてその考えを尊重している状況」「一部の者が問題視しているが、他の者は問題視していない状況」の3つのタイプに分ける。問題視する程度については、「当該観光を受忍できない程度」か「当該観光を受忍できる程度」かで分ける。受忍したくないが、生活のために無くては困る等の場合は「当該観光を受忍できる程度」に含むものとする。いずれ

の場合であっても、現実としては関係者間で、それぞれの利害、権利などを考慮して、当該観光を認めるか否かを判断することになる。

次に、観光者については、まず「問題ある観光との認識があるか否か」で分け、認識がある場合には、その程度について、自らが「当該観光を行うことは問題ない」「当該観光を中止する程ではない」「当該観光を行うべきではない」という3つの段階に分ける。問題ある観光との認識がある観光者は、自らの観光欲求、そこに費やす時間的・金銭的コスト、そしてその問題の重大さなどを考慮して自らの倫理観で当該観光を行うか否かを判断することになる。

(2) 本稿の視点と調査対象の条件

ホスト地域が、「ほぼすべての者が問題視している状況」および「問題視するのは一部の者であるが、地域としてその考えを尊重している状況」であり、その程度が「当該観光を受忍できない程度」であれば、基本的にそのアクティビティは何らかの規制がされるだろう。その場合、規制を破って行うことは明らかな違反であり、認識の違いを論じるまでもない。一方、同じ状況であっても、問題視する程度が「当該観光を受忍できる程度」であれば観光は認められる。また、「一部の者が問題視しているが、他の者は問題視していない状況」の場合は、問題視する程度にかかわらず関係者による調整等で観光を認めるか判断することになる。その場合、観光が認められているからといって問題の程度が「当該観光を受忍できる程度」であるとは限らない。その観光が一部の者にとって「当該観光を受忍できない程度」だとしても他の者との力関係等によっては、地域として観光を認める場合があることに留意する必要がある。

問題視されていたとしても当該観光アクティビティが禁止されていない場合、それを行うかどうかは、観光者の倫理に委ねられる。禁止されていなくても、問題の性質を踏まえて「当該観光を行うべきではない」と判断する観光者もいるだろう。一方、外形的に観光が認められているのであれば、観光者としてはその観光が問題視されていることを認識しつつも、「当該観光を受忍できる程度」もしくは「一部の者が問題視しているが、他の者は問題視していない状況」と認識し、結果として「当該観光を行うことは問題ない」「当該観光を中止する程ではない」と考えても無理はない。その場合、観光者が当該行為を行ったとしても、それを非倫理的行為だと断言することはできない。

本研究は、明らかに問題ある観光を行う観光者の意識を調べるものである。そのためには、本音であれ建前であれ、「問題視していても利益のためにその観光を許容しているなら問題はない」「問題視しているのは一部の人間だから、その行為が明らかに問題あるとは言えない」といった理屈が通用しないくらい、その行為を行うべきではないことが明白であり、かつ当該観光が禁止されていない（＝観光者の判断で行うことができる）ような事例を調査することが望ましい。そこで、オーストラリアの主要観光地のひとつであるウルルの登山観光に注目した。詳しくは後述するが、ウルルは2017年11月1日に、その所有権が認められているアナング族の文化的事情などから、2019年10月26日から登山を禁止することが決定された。もはや、ウルル登山を一部の

人々（＝アナング族）だけが問題視しているという状況ではない。それまでの期間は登ることが認められているとはいえ、登山禁止が決定された理由を考えれば、現時点で登山を行うべきではないことは明白である。つまり、禁止されるまでの期間は、本稿のテーマである明らかに問題ある観光を行う観光者の意識を調べるうえで貴重な機会なのである。そこで、本研究では、禁止されるまでの期間におけるウルル登山に対する日本の旅行会社の対応やその期間に登山を行う日本人観光者の意識について調査し、考察していきたい。

3. ウルル登山の問題

(1) ウルルについて

ウルルは、オーストラリアのほぼ中央部にある世界最大級の巨大な一枚岩である。ウルル周辺はアウトバックと呼ばれる乾燥地帯であり、荒涼とした大地が見渡す限り広がっている。そんな大平原にそびえるウルルが夕日に赤く染まる姿は、オーストラリアを代表する景観だといえる。ウルルは、1987年に少し離れたところにある巨岩群カタジュタと共に、ユネスコの世界遺産リストに“自然遺産”として登録された。また、ウルルは、古くから周辺に住むアボリジニ（アナング族）の聖地とされてきた。ウルルの周囲にはアナング族が描いた岩絵などが残されている。そういった文化的側面が再評価され、ウルルは1994年に世界遺産の“複合遺産”になった。

「ウルル」という名称よりも「エアーズロック」という名称の方がなじみのある人も多いだろう。ウルルがアナング族の言葉であるのに対し、エアーズロックは1873年にその岩山を「発見」したイギリス人探検家が植民地総督の名から付けた名称である。オーストラリアは、1770年にイギリス人ジェームズ・クックがその一部をイギリスの領有であることを宣言し、1788年から流刑地として本格的な植民地化が進められた。白人は先住民アボリジニの土地を奪い、虐殺し、また、ヨーロッパから持ち込まれた病気の影響もあり、当初推定30万人余りであったアボリジニの人口は20世紀前半には6万人台にまで激減した。さらに有色人種を差別する「白豪主義」がとられ、オーストラリアは白人の国として発展していった。そんな歴史を背景に、「ウルル」ではなく「エアーズロック」という名称が世界的に知られるようになったのである。

Parks Australia（現在ウルルを管理している政府機関）によれば、1948年に鉱物資源開発のためにウルルへの道路が整備され、坑夫とともに観光者も訪れるようになったのがウルル観光の始まりだという。その後、1959年に旅行会社によるホテル等の営業が認められ、観光開発が進んでいく。1970年代になると、白豪主義から多文化主義へと転換する政治的な動きのなかで、アボリジニの権利回復の動きも盛んになった。そして、1976年にウルルのあるノーザンテリトリーで「アボリジニ土地権法」が成立し、その後各地でアボリジニの土地の権利が認められるようになっていった。その流れのなかで、1980年代から次第に「エアーズロック」に変わり「ウルル」という名称が広く使われるようになった。そして、1985年にウルルの所有権がアナング族に返還され、ウルル・カタジュタ国立公園は、アナング族からオーストラリア政府に有償で貸し出され、アナング族と政府機関であるParks Australiaによって共同管理されることになった。こうしてウ

ウルルは、世界中から観光者が集まるオーストラリアを代表する観光地となり現在に至っている。

(2) ウルル登山問題と禁止への経緯

ウルルはアナング族の聖地であり、ウルルに登ることは特別な意味を持っている。誰でも気軽に登るようなレクリエーションの対象ではない。したがって、アナング族は、観光者によるウルルへの登山を快く思っていなかった。一方、白人にとって荒野にそびえるウルルは恰好の登山対象であった。Ayers Rock Resortによれば、初めてのウルル登山記録が残っているのが1936年だという。その後、登山による死者が出たこともあり、1966年に登山のためのチェーンが設置された。その際、アナング族に相談や同意を得ることはなかったという。さらに、1976年にチェーンはアップグレードされた。こうして、ウルル登山はウルル観光の主要なアトラクションになっていったのである。

ウルルの観光開発が始まった当初、「地元アボリジニコミュニティは疎外され、観光客からの圧力に屈し、アトラクションの運営にたいして何も発言できないような状態」(別府 2004)であったという。しかし、その後の先住民の権利が認められる流れの中で、ウルルに登って欲しくないというアナング族の考え方も知られるようになっていく。1985年にウルルの所有権がアナング族に返還された時には、アナング族が求める登山禁止には至らなかったが、登山を問題視する声は着実に広まっていき、「ウルルに登るべきか、登らざるべきか」が広く問いかけるようになっていった。

そして、2009年にオーストラリア政府は、文化・安全面の理由から、観光者の入山を禁止する計画を検討していることを発表した(AFPBB News 2009年7月9日)、結局、観光業への配慮から当面は入山禁止にはしないことになった。しかし、2010年に政府は「Uluru-Kata Tjuta National Park MANAGEMENT PLAN 2010-2020」(Australian Government Director of National Parks 2010)をまとめ、ウルル登山を恒久的に禁止するための条件(表1)と、禁止する場合に少なくとも18か月の猶予期間を設けることなどを発表するに至ったのである。

表1 ウルル登山を恒久的に禁止する条件

(「Uluru-Kata Tjuta National Park MANAGEMENT PLAN 2010-2020」より抜粋)

The climb will be permanently closed when:

- the Board, in consultation with the tourism industry, is satisfied that adequate new visitor experiences have been successfully established, or
- the proportion of visitors climbing falls below 20 per cent, or
- the cultural and natural experiences on offer are the critical factors when visitors make their decision to visit the park.

ウルルの伝統的所有者であるアナング族の考え方を尊重し、登山に反対する声が高まっていく一方で、ウルル登山者による問題行為も発生する。ABCニュース（2017年11月1日）は、2010年にウルルの頂上でフランス人女性がストリップダンスを踊るパフォーマンスを行ったことをはじめ、いくつかのウルルへの畏敬の念を欠いた行為があったことを報じている。そして、2015年に登山用のチェーンが切られる事件（抗議行動）が発生したが、当時それをウルルに登るためのチェーンを完全に削除する機会として捉える声もあったという（同）。ウルル登山を問題視する声の高まりもあり、1990年代にはウルルを訪れた観光者の約74%がウルル登山を選択していたのに対し、2011年から2015年にかけては観光者のうち登山を選択する者の割合は約16%と大幅に減少したのである（SBS News 2017年7月1日）。

以上のように、ウルル登山を認めるか否かの議論は長い間続いてきた。そして、2017年11月1日、ついにアナング族や政府でつくるウルル・カタジュタ国立公園運営協議会（Uluru-Kata Tjuta National Park Board of Management）は、条件が整ったとして、2019年10月26日からウルル登山を禁止することを決定し、政府が公式発表したのである（Australian Government Department of the Environment and Energy 2017）。

(3) 状況分析

ウルル登山が容認されていた頃は、「一部の者が問題視しているが、他の者は問題視していない状況」であったといえる。ただし、問題の程度認識に関しては、二つの捉え方ができる。越智（2010）は、1985年にウルルがアナング族に返還され政府との共同管理とされた（管理理事会のメンバーはアナング族の方が多く、実質アナング族にウルルを閉鎖する権限が与えられていた）ことについて、アナング族はウルルに登る観光者をミンガラマ（頭のおかしい蟻）と笑うが、観光者が落とすお金や政府の賃料は彼らの命綱でもあり、政府はアナング族がウルルを閉鎖できないと考え、彼らに多くの裁量権を与えたのだと述べている。この状況は、アナング族はウルルに登る観光者の行動を軽蔑しているものの耐え難い程ではなく、収入のために「当該観光を受忍できる程度」だったと解することができる。一方で、「一部の者が問題視しているが、他の者は問題視していない状況」とはいえ、その「一部の者」が立場の弱い少数民族のアナング族であり、「他の者」がマジョリティである白人のオーストラリア人という状況であった。その後先住民の権利が認められるようになりつつも、保護される立場であり、観光収入等が「命綱」であったという状況を考えれば、アナング族にとってウルル登山が「当該観光を受忍できない程度」の問題であったとしても、いわば「受忍せざるを得ない状況」だったと考えることもできる。少なくとも、Maher(2013)の記事によれば、アナング族がウルルに登らないことを求めてきたことは事実である。もちろん、すべての観光者がそういった現地の複雑な状況を理解しているわけではない。観光者側の視点でみれば、先にも述べたが、ウルル登山が認められている以上、仮に登山が問題視されていることを知っていたとしても、「一部の者が問題視しているが、他の者は問題視していない状況」もしくは「当該観光を受忍できる程度」だと考え、「当該観光を行うことは問題な

い」「当該観光を中止する程ではない」と考えるのはやむを得ない側面があった。

しかし、ウルル登山禁止が正式に決定され、これまでのウルル登山の是非に関する長い論争に終止符が打たれた今は、状況が異なる。アナング族が禁止に踏み切ったということは、観光収入が減少したとしてもウルルに登って欲しくないという意思表示であり、ウルル登山への思いが「当該観光を受忍できない程度」であることを示している。また、現在は「一部の者が問題視しているが、他の者は問題視していない状況」ではない。オーストラリアとして、ウルル登山はアナング族の権利、思想を踏みにじるものであり、非倫理的行為だと認めたのである。まさに「問題視するのは一部の者であるが、地域としてその考えを尊重している状況」だといえる。猶予期間の間は登山が可能だとしても、禁止される日までならば登山を行っても倫理的に問題ないという状況ではない。登山禁止に至った理由、経過を考えれば、現段階で行うべきではないことは明らか状況なのである。この状況において観光者が登山を行うことはもちろん、旅行会社などがウルル登山をアピールして参加者を募ることは、明らかに非倫理的な問題行為だといえる。

4. 旅行会社の対応と観光者の意識

(1) ウルル登山禁止決定後の動向

ウルル登山禁止決定後も、2019年10月25日までは猶予期間であり、それまでは日本からのウルル登山を含むツアーはもちろん、現地発着のウルル登山ツアーなども行われている。しかし、少なくとも、現地では大きく宣伝されてはいない。オーストラリア政府観光局の公式webサイトでは、「ウルルは、オーストラリア先住民の文化や精神が息づく古来の聖地です。」と聖地であることを強調し「アボリジニのガイドの案内でウォーキングを楽しみ、ドリームタイム（アボリジニの創世神話）の時代から伝わる古来の伝統や言い伝えを学びましょう。ヘリコプターや熱気球に乗って上空から眺めることもできます。ハーレー・ダビッドソンのバイクやラクダに乗って、黄土色の砂漠を巡りませんか。」と登山以外のアクティビティを提案している。登山に関しては、「ウルルに登ることはできますが、先住民たちはここを聖地として大切にしているため、登ることはありません。文化的伝統を尊重し、他者にも登らないようすすめています。」と明記されている。つまり、禁止前とはいえウルルに登ることを思いとどまらせるような記述がされている。登山禁止が決定された経緯を考えれば当然だろう。

一方で、禁止決定後もウルル登山を行う人は後を絶たない。アボリジニに関する情報を発信しているWelcome to Countryの記事（2018年10月17日）によれば、禁止決定が発表される前は、1日あたり約50～140人が登山を行っていたが、2018年10月頃には300～500人が登っているという。禁止が発表されて以降、むしろ増加しているのである。

なお、ウルル登山禁止決定前のデータでは、ウルル登山を行う者のうち、最も多いのはオーストラリア人であり、2番目に多いのが日本人だという（Welcome to country 2017年11月5日）。オーストラリアへの観光者数（2018年度）は、日本は5番目であることを考えると（Austrade 2018）、日本人の登山率の高さがわかる。少し古いデータだが、国立オーストラリア大学の調査

で、当時最もウルルに登る割合が高いのが日本であり、日本人の83%が登ることを選択しているという（The Guardian 2013年7月9日）。これらのことから、日本人には特にウルル登山の倫理的ハードルを下げる何らかの要因があるのではないかと考えられる。よって、本研究では日本人観光者および日本の旅行会社を研究対象としたのである。

(2) 旅行会社の対応

ウルル登山禁止決定後の日本の旅行会社の対応については、禁止前最後の夏休みに向けたツアー参加者募集が活発になる2019年5月に、主要旅行会社5社（旅行取扱額の上位5社）のWebサイト等で調査した。

A社は、「2019年10月26日からエアーズロック登山禁止へ… エアーズロック特集」という特集ページを設けている。そこでは、「世界中から注目が集まり2019年は大変な混雑が予想されます。さらに5～9月はエアーズロックのベストシーズンです。」と目立つように書かれている。さらに「おトクポイント」として強調されている4項目のうち、2項目目に「エアーズロックの登山が2019年10月26日から禁止になることが決定！世界最大級の一枚砂岩の上から、ダイナミックな眺望をご覧いただける貴重な体験ができる？！天候や気温、風の強さ、宗教上の事由などにより登山口が閉まる場合があります。そのため登山のチャンスを2回ご用意しました!!」と記載されている。そして、4項目目には「あると嬉しい便利グッズ（2500円相当）をご用意！」として、エアーズロック登山に必要な小物を現地で渡すことをアピールしている。少なくとも、この特集ページには、登山が禁止される理由などについて書かれてはいない。また、同社の現地オプションツアー広告でも、「ウルル登山は2019年10月25日をもちまして閉鎖となります。これは国立公園とウルルの伝統的な所有者“アナング族”の判断により決定いたしました。地上から鑑賞するウルルも十分素晴らしいものですが、登山して頂上からの壮大な景色を見る事のできる最後のチャンスです。どうぞこの機会をお見逃しなく！」と記載されている。アナング族の判断によると記載されているものの、その中身については触れていないうえ、「最後のチャンス」「この機会をお見逃しなく！」と強く登山を勧めているのである。

B社も、エアーズロックの特集ページを作成している。そして、「2019年10月26日から登山が全面禁止に！」と示したうえで、「登頂するなら今がチャンス！」と大きな文字で強調してある。そして、「準備とご注意」として帽子や手袋、両手が自由になるリュックなど、エアーズロック登山に必要なものを具体的に列挙している。ただし、A社とは異なり、「エアーズロックの登頂はアボリジニの文化的事情により、あまり推奨されておらず、2019年10月25日をもって登山口が閉鎖されることが決定しました。」と、閉鎖理由にも触れている。しかし、「今がチャンス」とまで書いているため、登山をアピールしていることは明白である。また、店頭に置かれているパンフレット（2019年6月から2020年3月出発 オーストラリア ニュージーランド）でも、「今こそウルルへ！」「今しかできない貴重なエアーズロック（ウルル）登頂を体験ください。」と、閉鎖前の登頂を勧める内容が目立つように記載されている。

C社は、オーストラリアやエアーズロックの特集ページを組んではいない。しかし、ウルルを含むツアーの紹介ページでは、「充実のウルル（エアーズロック）観光！登頂のラストチャンス！この機会をお見逃しなく！」「～ウルルに登頂できるのは2019年10月25日まで～見るだけでもその存在感には圧倒されるものがありますが、登頂をお考えの方はお早目にご旅行をご検討ください！！」「登頂のチャンスは、2回！（4～10月出発）」といった内容が目立つ。また、「エアーズロック登頂のご注意」の欄には、頂上までの所要時間や、軍手や帽子、両手を自由にするためにリュックが必要であることなどが具体的に書かれている。アナング族の人々が登らないよう訴えていることを含む閉鎖理由などへの言及は見られない。

D社は、世界遺産エアーズロック（ウルル）特集を組んでいる。その中で、「ウルル登山は登山率の高い5～8月がおすすめ」、「登山口が開いている日のみエアーズロック登山をお楽しみいただけます（2019年10月25日まで）初心者でも登山は可能ですが、行程の最初の3分の1はチェーンをつかみながらの登山となります。体力に余裕を持つての挑戦がおすすめです。」と書かれている。この特集ページのなかでは、間もなく禁止になることを理由に登山をあおるような記述は見られない。ただし、個別のツアー紹介ページを見ると、「2019年10月26日～エアーズロック登山終了！今がラストチャンス！5～8月は平均気温が25℃以下で過ごしやすく登山の催行率も高まります。当コースはエアーズロックに2連泊し、内容充実！このチャンスにぜひ訪ねてみよう！」と書かれている。いずれのページにも、アナング族の人々が登らないよう訴えていることを含む閉鎖理由などへの言及は見られない。

E社も、エアーズロックツアー特集を組んでいる。そこでは初めにエアーズロックについて簡単な解説をしたあと、エアーズロックインフォメーションとして「ウルル登山のご案内とご注意」の欄が設けられている。そこには、4月～8月の月別登山催行率や服装・持ち物などが書かれている。さらに「どういう観光をするの？」の欄中「ウルル（エアーズロック）登頂」の項目では、「最大傾斜45℃の急斜面を途中鎖を使いながら昇るウルル（エアーズロック）の登山は往復2～3時間かかります。頂上からは360℃のパノラマ眺望がお楽しみいただけます。」（「昇る」は原文のまま）と記載されている。E社の特集ページの場合、登山に関する案内はあるものの、最後のチャンスであることはアピールしておらず、また、「アボリジニはウルル（エアーズロック）の登頂を推奨していません。」という記述もみられた。ただし、E社のツアーのパンフレットでは、ツアーのポイントとして「4～9月出発ならウルル登山のチャンスは最大4回！可能な限り観光を登山に振り替えます！」、「2019年10月26日よりウルル（エアーズロック）登山が全面禁止と正式発表されております。一生ものの風景を限られた今、この目にしっかり焼きつけませんか。」など、ウルル登山が最後のチャンスであることをアピールして登山を勧めていた。

以上、ウルル登山禁止発表後の国内主要旅行会社5社の登山への対応をみてきた。すべての旅行会社が、禁止が決定された登山をウルルでのアトラクションとして観光者に示していた。それだけではなく、すべての旅行会社が、特集ページまたはツアーの紹介ページで、ウルル登山が最後のチャンスであることをアピールして登山を勧めていた。5社中2社はウルル登山をアナング

族（アボリジニ）が推奨していないことを記載しているものの、旅行会社としてその考えを尊重しようという姿勢はまったく感じられない。旅行会社は当然登山禁止に至った背景を知っているはずであるにもかかわらず、むしろ「ウルル登山のラストチャンス！」と観光者をあおっているのである。旅行会社として、禁止に至った事情は知識として知っているだけで、本音として登山を行うべきではないとはまったく感じていないことがわかる。ウルル観光の起点であるエアーズロックリゾートでは、登山ツアー自体は行われているものの、Web上も含めて、「最後のチャンス」と登山をあおることはもちろん、登山ができること自体を積極的にアピールしてはいない。日本の旅行会社の対応と現地への対応は大きく異なっているのである。

(3) 観光者の意識

登山禁止決定後にウルルに登る観光者の意識については、禁止前最後の夏休みとなる2019年8月に、ウルルおよびウルルを訪れる大半が宿泊するエアーズロックリゾート等で、今回の旅行中にウルルに登る（登った）観光者に対して半構造化インタビュー形式で調査を行った。

まず、ウルルを訪れることにした理由を聞くと、「ウルルに登るため」「ウルルに登れる最後のチャンスだから」「今登っておけば、今後ウルルに行く人に登ったことを自慢できるから」などの答えが返ってくる。登山だけがウルル観光ではないが、登山が主目的であり、かつ「最後の機会」であることがプル要因になっていることがわかる。ウルルに興味を持ったきっかけを尋ねると、「夕日を浴びて真っ赤に染まる神秘的ウルルが見たかった」「世界最大級の岩として有名だし、荒涼とした大地にそびえるウルルの姿は誰もが知る有名な景色で、昔からあこがれていた」「“オーストラリアといえばエアーズロック” なくらい有名だから」「やっぱり世界遺産だから」「昔何かで写真を見たときからいつか行ってみたいと思っていた」「セカチューの舞台」という声が聞かれた（「セカチュー」とは、映画化・ドラマ化された小説「世界の中心で愛を叫ぶ」のこと）。確かに、荒野にそびえるウルルの写真は誰もがどこかで目にしたことがあるだろう。その景観を一目見たいというのが観光者の気持ちである。一方、訪問理由や興味を持ったきっかけとしてアナン族の文化を挙げる者は一人もいなかった。なお、世界遺産であることを訪問動機のひとつとして挙げた人に世界遺産の何遺産かを聞くと「自然遺産」との答えであった（実際は複合遺産）。

ウルル登山が禁止される理由を知っているか尋ねると、「アボリジニにとって聖地だから」「アボリジニの人は登ってほしくないらしいから」「聖地だからアボリジニが反対しているからでしょ」など、少なくともアナン族（アボリジニ）の聖地であり、彼らが登山を問題視していることは知っていた。ただし、それを知ったタイミングは、以前から知っていた者もいれば、ウルルに行くことに決めた後で知った者もいた。

問題視されていることを知っているにもかかわらずウルルに登ることにした理由を尋ねると、「みんな登っているから」という答えが最も聞かれた。確かに登り口までくれば、マラウオーク（散策コースのひとつ）を歩く者以外、ほとんど「みんな」ウルルに登ろうとする者である。し

かし、多くの場合登る決断はそれより前である。では、「みんな登る」という認識は何から生じたのだろうか。話をするなかで、ウルルに来る前に過去に登った観光者のブログを見たり、旅行会社のツアー広告やガイドブックでウルル登山をアピールしているのを見て、「みんな登る」という意識が形成されていることがうかがえた。「(旅行会社の) 窓口の人に今しか登ることができないと勧められて、せっかくだから登っておこうと考えた」などの声もあり、旅行会社や各種メディアの影響がいかにか大きいか分かる。また、ウルルに興味を持った理由として荒野にそびえるウルルの姿等の景観を挙げた者に、なぜ登ることにしたのか尋ねると、「登れるなら登って、上からの景色をみたい」、「せっかく来たなら登るでしょ」「どうせ行くなら登りたい」「見るだけじゃもったいない。登れるならもちろん登る。」という。本来、「見る」と「登る」は楽しみ方として同じではない。しかし、両者は当たり前のように同列で語られている。それぐらい、登ることは当たり前の行為という認識なのである。

アナング族が登らないで下さいと訴え、登山禁止が決定している状況でウルルに登ることに「やましき」を感じないのか聞いてみた。「まだ禁止されているわけじゃないから問題ない(やましくない)。」と言う答えが複数みられた。ある程度やましきを感じているだろうと考えていたが、予想に反してほとんど感じていないようだった。さらに、「富士山だって信仰の山だけど今は登っている。」「ウルルを神聖視していたのは昔のアボリジニで、今はただアボリジニの権利のシンボルみたいになって神聖だから登るなどと言っているだけでしょ。いまさら感がある。」「ウルルはアボリジニの聖地かもしれないけど、彼らが作ったものじゃない。自然物なんだから登りたい人は登ってもいいのではないか。」「世界遺産だからみんなのもの。今はアボリジニだけのものじゃない。そもそも、オーストラリア自体そうだし。」「自然なんだし、彼らだけのものではない。拝むのは自由だけど、登る自由だってある。」と言う。彼らが、そもそも登山禁止が決定されたこと自体に疑問を感じていることがわかる。

「少しやましい気持ちはある」と言う者もいたが、その後の会話からウルルを神聖視しているアナング族に対して悪いことをしているという認識ではなく、登り口にはっきりと日本語で「ウルルに登らないで下さい」と書かれた看板が設置されているため、「やましき」を感じたようであった。また、ツアーや航空券を購入した後にウルル登山が問題視されていることを知った人は、「登ることはアボリジニの人々に申し訳ないとは思うけど・・・」と前置きをしつつ、「もうお金も払ったから。」「ウルルまで来ちゃったし、今さら登らないのも・・・」など、すでに来ている、お金を払っていることを、申し訳ないと思いつつも登る理由にする場合がみられた。しかし、「登る前」に問題があると知っていたことには変わりない。ウルルで唯一の観光方法が登山であるなら彼らの主張は理解できるが、ウルルには登山以外の楽しみ方も多数用意されている(旅行会社のツアーでも登らない人向けの選択肢は用意されている)。そして、現にウルルを訪れる人の約8割は登らない楽しみ方を選んでいるのである(SBS News 2017年7月1日)。したがって、すでに来ている、お金を払っていることは、申し訳ないと思いつつも登る理由とはいえない。逆に、本心では「申し訳ない」とさほど思っていないことが言葉の端々からうかがえるのである。

いずれにしても、登ることに決めた観光者に、問題行為をしているという意識、登ることに対する迷いなどは、まったくといっていい程、感じられなかった。

5. 考察

調査結果から、禁止決定後にウルル登山を行う日本人の特徴を次のように挙げることができる(表2)。

表2 禁止決定後の日本人ウルル登山者の特徴

禁止決定後の日本人ウルル登山者の特徴

- * 禁止理由に対する共感的理解の欠如
- * 神聖な山に対する日本的感覚
- * 認知的不協和状態解消プロセスとしての善悪判断の他者準拠傾向
- * 文化観光ではなく自然観光としての認識
- * ウルルに対する共有物として認識

まず、ウルル登山禁止発表後に登山を勧める日本の旅行会社や登山を行う観光者の行動の背景には、ウルル登山が問題であることは認識しつつも、本音の部分で良くない行為だとは認識していない。つまり禁止理由に対する共感的理解が欠如していることが指摘できる。登山禁止につながったアナング族の当該行為を問題視する考え方に対する共感的理解があれば、たとえ猶予期間で登山自体が禁止されていなかったとしても、旅行会社が「最後のチャンス！」と登山をあおることや、「まだ禁止されていないから問題ない」と公然と行うようなことは慎まれるだろう。ウルル登山が問題視されていることを知りつつも登山ツアーが公然と宣伝され、多くの日本人観光者がためらうことなく登っている現状は、この問題に対する日本人の共感的理解の欠如を示しているといえる。なお、ウルルに登る観光者の一部が口にする“やましさ”は、ウルル登山を本当に悪いことだと共感的に理解したうえでアナング族に対して感じる気持ちではない。良くないことだと知られていること、そして目の前に「登らないで下さい」と書かれていることを行っている自分に対する他者のまなざしを意識して生じる感情なのである。Benedict (1946)の表現を借りるなら、問題そのものに対する良心による「罪」の意識ではなく、世間の目を気にして感じる日本人的な「恥」の意識から生じる“やましさ”だといえる。

日本的な感覚と言う意味では、富士山の例を出した観光者の声や、ウルルを神聖視していたのは昔の事という考えなどから、ウルル登山を行う背景に神聖な山に対する日本的感覚があると考えられる。日本にも山岳信仰は古くから各地に存在していた。そして、山岳信仰の霊場は、かつては厳格な修行・精進潔斎と登岳拝礼儀式が定められていたり、修験の行を積む者にしか開かれていなかったりしたという(布川 2015)。しかし、1872年に明治政府が「神社仏閣之地女人結界

之場所ヲ廃ス」として女人の登山規制を解き、日本三霊山のひとつ白山にも女性が登るようになったという(石川県白山自然保護センター 2018)。その後、日本各地の信仰の山では、登山のレジャー化、大衆化が進んでいった。もちろん山岳信仰の変遷を知る者は少ないとしても、日本にも山岳信仰があること、それらの山が現在はレジャーとして気軽に登ることができることは多くの者が感覚的に知っている。そういった感覚が無意識にウルル登山に対する考えに影響し、先住民がウルルを登るべきで無いほど本気で神聖視していたのは過去にすぎないという感覚になるのだと考える。

ウルル登山を問題だと認識しつつも行う理由として観光者が口にする、「みんな登っているから」、「旅行会社がすすめているから」、「禁止されていないから」などの発言からは、ウルル登山の問題を理解したうえで、主体的に登ることの善悪を判断していない(もしくは判断することを避けている)ことがわかる。それは、善悪判断の他者準拠傾向ともいえる。他者の考えに準拠するならば、登らない人の方が多い現実、アナング族の登らないで下さいという訴え、登山禁止を決定したオーストラリア政府の判断等に従って、登るべきではないと判断してもよいはずである。しかし、ウルルに登る登山者は、結局は登りたいという自分の欲求を肯定するような他者の意見や行動を採用しているにすぎない。それは、いわゆる認知的不協和状態の解消プロセスとして理解できる。ウルルに登る観光者は、「私はウルルに登る」しかし「一般的にウルルに登ることは良くないとされている」という倫理的矛盾を抱えた一種の認知的不協和状態にある。この認知的不協和状態は、「私はウルルに登らない」という判断に変えることで解消できる。しかし、登りたいという欲求に加え、先に述べたウルル登山禁止理由に対する共感的理解の欠如の影響もあり、「私はウルルに登らない」という選択は避けたいという感情が働く。そこで、認知的不協和状態を解消するために、「一般的にウルルに登ることは良くないとされているが、“みんな”登っている。それほど悪いことではない。」という認知に変更する必要がある。そして、ウルルに登った人のブログや登山を勧める旅行会社の広告、ガイドブックの情報などがそれを可能にしているのである。

ウルル観光を「自然観光」と認識していることも、ウルルに登る日本人の共通点として挙げられる。ウルルは「自然」と「文化」の両面が評価されて世界遺産の複合遺産になっている。しかし、日本人観光者は、世界最大級の岩、頂上から見る360度の大自然、荒涼とした大地の真ん中で夕日を浴びて赤く染まる姿など、ウルルの自然としての側面に魅かれて観光に来ている。そして、自然観光としてウルルを楽しむための行動が登山なのである。観光者の言葉からは、「ウルル観光＝登ることも含めた一連の観光」として捉えている印象を受けるほど、登ることはあたりまえの行為なのである。松井ら(2015)は「ウルルがアナング族の人びとにとって意義ある聖地であることが、ウルルの観光資源としての価値を高めていることに異論はないであろう」と述べている。実際に、ウルルの周囲にあるアナング族が描いた岩絵等も観光対象となっている。一方で、窪田(2010)は、「そこに残された岩壁画などのアボリジニの文化要素は、その地をさらに興味深いものにしていることは確かであるが、アボリジニ独自の文化的な内容まで踏み込んで

学ぶことを観光の目的としている人はほんの一握りである」と述べている。今回の調査でも、ウルルに来た目的としてアナング族（アボリジニ）の文化への興味を挙げる者がいなかったことはそれを裏付けている。少なくとも、ウルルに登る観光者にとっては、ウルル観光は文化観光ではなく自然観光として認識されている。それゆえ、アナング族の文化的事情は重視されず、自然観光としてウルルに登るという行動につながっていると考えられる。

また、「自然なんだし、彼らだけのものではない。拝むのは自由だけど、登る自由だってある。」「世界遺産だからみんなのもの」といった発言から、ウルルに登る観光者たちには、ウルルは先住民であるアナング族だけのものではないという認識があることがわかる。それは、オーストラリア政府が先住民の所有権を認めたことを知っているかどうかという問題ではない。市川ら（2016）は、世界遺産白川郷の民家の敷地に観光者が侵入する行為について、「観光客による住民の私的領域の侵入には、世界遺産化に伴う合掌造り集落の公共財化が背景にある。ユネスコの世界遺産という人類共通遺産を示すラベリングが、一部の人間にとっての私的領域と公的領域との境界を曖昧にし、私有地への立ち入りや無遠慮にカメラのレンズを向ける行為に繋がっている。」と述べている。民家でさえそうなのであれば、荒野にそびえる自然物の岩山であるウルルの場合にはなおさら“誰かのもの”という感覚は薄らぐだろう。ウルルに登る観光者は、ウルルを“みんなのもの”つまり一種の共有物として認識している。それゆえに、アボリジニの文化的事情で登山を禁止すること自体に疑問を感じているのである。

6. 結論

本稿ではウルル登山という問題ある観光を行う日本人観光者の意識について考察してきた。筆者はかつて観光者の問題行為の原因のひとつとして、文化的無知を挙げた（宮本 2008）。もちろん、それが問題行為の原因であることに変わりはない。しかし、今回の研究で、当該行為が文化的に問題があるという知識のみでその行為が抑制されるとは限らず、その問題に対する共感的理解が重要であることが示された。

観光者の共感的理解を得られるか否かは、観光者がそれまでに内面化してきた文化、慣習、価値観などと深くかかわってくる。したがって問題の性質によっては共感的理解を得ることは簡単ではない。特に、“神聖さ”のようなある種の宗教的価値は、宗教や文化の異なる人々が共感的に理解することは困難であろう。そういった場合であっても、その行為がいかに関係あるかを観光者に伝える努力は必要である。共感的な理解が得られずとも、現地の人々の考えを尊重し、それに従ってもらうことができれば問題は解決できる。しかし、今回の調査で話を聞いた観光者は、ウルル登山がなぜ問題かを知っており、また現場の看板等で「ウルルに登らないで下さい」と明示されているにもかかわらず、自らの行為が非倫理的行為だという認識はほとんど無かったのである。共感的理解が難しい問題ある観光の場合、「禁止されていない＝行っても問題ない」と考え、自らの観光欲求を優先させてしまうのである。共感的理解が難しい問題に対し、問題とされる理由等を伝える（あとは観光者の倫理に委ねる）だけでは、観光者の行為を意図した方向

へと導くことは難しいだろう。

松井ら(2015)は、「エスニック・ツーリズムとして真正性を担保するのが『ウルルに登らないという態度』である」と述べている。逆に考えれば、観光者がウルル観光をエスニック・ツーリズムとして認識していれば、ウルルの文化的価値、アナング族のウルルに対する考え方が尊重され、ウルルを登山対象として見る者は減少するのではないだろうか。現在、観光者が求めるウルルは自然観光としての魅力である。また観光地側については、オーストラリア政府観光局のWebページなどではウルルの文化的側面も取り上げているものの、使われている写真などを見れば真っ赤に染まるウルルの姿など自然観光としての魅力を最もアピールしているといっても過言ではない。ウルル観光の魅力を発信する側が、自然観光から文化観光へとその位置付けを変えて発信するなどの工夫が必要なのではないだろうか。

ウルルの場合は、問題ある観光(登山)のへの対応として、禁止という措置をとった。それは確かに問題行為を無くす上で最も効果的な措置だといえる。しかし、観光者の問題行為は、単純に禁止することで解決できるものばかりではない。その場合、問題行為であることを観光者に示し、観光者の倫理に訴える工夫も必要である。ただし、問題の性質によっては、観光者の倫理の問題だと考えていては、解決の糸口が見つからなくなるケースもあるだろう。事例毎に、問題行為を行う観光者の意識等をしっかりと把握し、問題の性質を見極めたうえで、それぞれの事例に合った解決策を模索する必要がある。

引用・参考文献

- AFPBB News (2009年7月9日)『『エアーズロック』が入山禁止に?豪政府が検討』(https://www.afpbb.com/articles/-/2619375?pid=4344382 最終参照:2019年9月3日)
- Australian Government Department of the Environment and Energy, 2017, “Media Release 1 November 2017 Uluru climb to close” (https://www.environment.gov.au/mediarelease/uluru-climb-close 最終参照:2019年9月3日)
- Australian Government Director of National Parks, 2010, “Uluru-Kata Tjuta National Park MANAGEMENT PLAN 2010-2020” (https://www.environment.gov.au/system/files/resources/f7d3c167-8bd1-470a-a502-ba222067e1ac/files/management-plan.pdf 最終参照:2019年9月3日)
- Australian Trade and Investment Commission (Austrade), 2018, “Australia’s tourist arrivals exceed 9 million in 2018” (https://www.austrade.gov.au/news/economic-analysis/australias-tourist-arrivals-exceed-9-million-in-2018 最終参照:2019年9月3日)
- オーストラリア政府観光局「ウルル・ウルル (Uluru)、ノーザン・テリトリー (Northern Territory)」(https://www.australia.com/ja-jp/places/red-centre/nt-uluru.html 最終参照:2019年9月3日)
- Ayersrockresort “History & Facts” (https://www.ayersrockresort.com.au/around-the-resort/about-ayers-rock-resort/history-and-facts 最終参照:2019年9月3日)
- Benedict, R., 1946, “*THE CHRYSANTHEMUM AND THE SWORD: Patterns of Japanese Culture*”, Houghton Mifflin, (=長谷川松治訳『菊と刀 日本文化の型』講談社、2005年)
- 別府祐弘 (2004)「観光ビジネスと環境」『帝京経済学研究』38(1), pp.139-170
- Damjanovic, D., 2017, “Uluru climbing ban: A history of disrespect atop the rock”, ABC News, November 1, 2017. (https://www.abc.net.au/news/2017-11-01/uluru-a-history-of-disrespect-atop-the-rock/9107750 最終参照:2019年9月3日)

- 市川康夫・羽田司・松井圭介 (2016) 「日本人・外国人ツーリストの観光特性とイメージにみる白川郷の世界遺産観光」『人文地理学研究』36, pp.11-28.
- 石川県白山自然保護センター (2018) 『白山の自然誌38 白山登山のうつりかわり』 (<https://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/publish/sizen/documents/sizen38.pdf> 最終参照：2019年9月3日)
- 金田章裕 (2002) 「白人入植者とアボリジニ」 小山修三・窪田幸子編『多文化国家の先住民 オーストラリア・アボリジニの現在』世界思想社
- 窪田幸子 (2010) 「アボリジニのオルタナティブ観光とその意味 - アーネムランドでの試みから (現代社会と先住民文化 観光、芸術から考える(1))」『北方民族文化シンポジウム報告書』24, pp.43-48.
- Maher, L., “The message is clear: please don’t climb Uluru”, ABC News, June 3, 2013. (<https://www.abc.net.au/news/2013-06-03/maher-please-don't-climb-uluru/4728726> 最終参照：2019年9月3日)
- 松井圭介・堤純・吉田道代・葉倩瑋・筒井由起乃 (2015) 「聖地ウルルをめぐる場所のポリティクスとアウトバックツーリズム」『地理空間』8(1), 131-142
- McNaughton, D., 2006, The “Host” as Uninvited “Guest”: Hospitality, Violence and Tourism, *Annals of Tourism Research*, 33(3), pp.645-665.
- 宮本佳範 (2008) 「観光振興における観光倫理教育の必要性——東南アジア地域の観光を念頭に」『第14回観光に関する研究論文入選論文集』: 19-35.
- 布川欣一 (2015) 『明解 日本登山史 エピソードで読む日本人の登山』山と溪谷社
- 越智道雄 (2010) 『オーストラリアを知るための58章第3版』明石書店
- Parks Australia, “History of Uluru-Kata Tjuta National Park” (<https://parksaustralia.gov.au/uluru/discover/history/> 最終参照：2019年9月3日)
- SBS News, November 1, 2017, “Traditional owners ban Uluru climb: From 2019 visitors to Uluru won’t be allowed to climb the sacred rock, traditional owners have decided” (<https://www.sbs.com.au/news/traditional-owners-ban-uluru-climb> 最終参照：2019年9月3日)
- Smith, V. (ed.), 1977, *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press. (三村浩史監訳『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる 地域文化の対応』勁草書房、1991年)
- 竹谷 鞠負 (2011) 『富士山と女人禁制』岩田書院
- The Guardian, July 9, 2013, “People still climbing Uluru despite closure condition being met” (<https://www.theguardian.com/world/2013/jul/09/people-still-climbing-uluru-closure> 最終参照：2019年9月3日)
- The Guardian, November 1, 2017, “Uluru climb banned from October 2019 after historic vote” (<https://www.theguardian.com/australia-news/2017/nov/01/uluru-climb-banned-from-october-2019-after-historic-vote> 最終参照：2019年9月3日)
- Welcome to Country, October 17, 2018, “They just don’t get it: number of tourists climbing Uluru skyrockets” (<https://www.welcometocountry.org/numbers-of-tourists-climbing-uluru-skyrockets/> 最終参照：2019年9月3日)
- Welcome to country, November 5, 2017, “Fact Check: Who are the people who still choose to climb Uluru?” (<https://www.welcometocountry.org/fact-check-people-who-climb-uluru/> 最終参照：2019年9月3日)
- 安村克己 (2011) 「観光の構成要素と構造」安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編著『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房

受理日 2019年9月19日